

# 古語拾遺正訓

下

			一五〇二	和書門
		二四	〇	類
二	三	四	函	架
函	架	函	架	架

庫	文	閣	内	
五	五	一	五〇二	和書類
函	函	二	〇	架
架	架	架	架	架

内閣文庫	
番號	和 15020
冊數	2 ( 2 )
函號	155 180



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





オビテニカムヤマトイムヒヨクミタラシトヒカシタカマタトシ庫

逮于神武天皇東征出年大伴氏遠

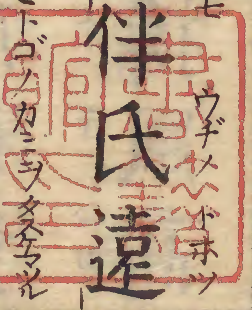
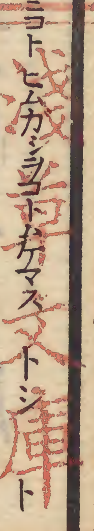
祖日臣命帥督將元戎剪除兇渠佐

命出勲無有比肩物部氏遠祖饒速

日命煞虜帥衆歸順官軍忠誠出効

殊蒙褒寵大和氏遠祖椎根津彦者

迎引皇舟表績香山出巔加茂縣王





トホツオヤヤタ ガラスハ マサテニヒキニユキラアラスシルラウダ  
遠祖八咫鳥者奉導宸駕顯瑞菟田

ノ ミチニワザハヒ スデニハレテナシマタサ ワギタテ、ミヤカラカシハラニ  
出徑妖氣既晴無復風塵建都檀原

ツクルオホミヤラカレシムアマノトミノミヨトヲ フトダマノミコト  
經營帝宅仍今天富命 太玉命 率手

オキホ オヒヒコサ ジリフスシラカニノ スエラモテイミヲノイミ  
置帆負彦狹知二神出孫以齋斧齋

スキラハジメテトリテヤマノキラツクラ ミアラカライハユルワコツイハ  
鉏始採山林構立正殿所謂底都磐

ネニミヤバシラ フ都タカマノハラニチギタカ  
根宮柱 立高天 乃原 搏風高

出利 ミト オシヒラキテスメリマノミコトノミヅノ  
御戸排 皇孫命 乃美豆 乃御

アラカ 手 ツクリマツレリ カレソノハツゴイマアリキノクニ  
殿 造奉仕也故其裔今在紀伊國

ナグサノコホリミケ アラカ フタサトニ  
名草郡御木麩香二郷 古語正殿 採

キライミ ベノトコロラルイフソラミ ケトツリシミエカライイミベノトコロ  
材齋部所居謂出御木造殿齋部所

ヲルイフソラアラカトコハソノアカシナリマタシムアマノトミノミヨトヲ  
居謂出麩香是其證也又今天富命

キテイミベノモロウチラツクサノカムダカラカニタマホコタテ  
率齋部諸氏作種種神寶鏡玉矛盾



木綿麻等櫛明玉命出孫造御祈玉

古語美保伎其裔今在出雲國每年

與調物貢進其玉天日鷲命出孫造

木綿及麻並織布仍令天富

命率日鷲命出孫求肥饒地遣阿波

國殖穀麻種其裔今在彼國當大嘗

出年貢木綿麻布及種種物所以郡

名為麻殖出緣也天富命更求汲壤

分阿波齋部率往東土播殖麻穀好

麻所生故謂出總國穀木所生故謂

出結城郡古語麻謂出總也今為阿

波忌部所居便名安房郡今安房天



トミノミコトス大チニソノトコロタツフトダマノミコトノヤシロイマイフソラ  
富命即於其地立太玉命社今謂出  
安房社故其神戸有齋部氏又手置  
帆負命出孫造矛竿其裔今分在讚  
岐國每年調庸出外貢八百竿是其  
事等證也爰仰從皇天二祖出詔建  
樹神籬所謂高皇產靈神皇產靈魂

下三

留產靈生產靈足產靈大宮賣神事  
代主神御膳神  
戸神豐磐間戸神  
是八洲出靈今坐摩靈今坐摩巫  
所奉日臣命帥來日部衛護宮門掌  
其開闔饒速日命帥内物部造備示

○正訓古語拾遺

○十八



盾其物既備天富命率諸齋部捧持  
タテラソノモノステニソクテアマノトミツミコトキテモロクノイミベヲサゲモチテ  
 天璽鏡劔奉安正殿并懸瓊玉陳其  
アマツミシシカニミツギラマツリオキミアラカニナラヒニカケタマヲツラネテソノ  
 幣物殿祭祝詞  
ミテグララオホトリホカヒノゴトマラス  
其祝詞文 次祭宮門  
在於別卷  
其祝詞亦 然後物部乃立矛盾大伴  
在於別卷  
クメタテツモラヒラキニカトラシム 來日建仗開門令朝四方出國以觀  
タカミクラノダフトキラニ 天位出貴當此出時帝出與神其際  
トキスメラミコトトオホミカミソノアヒダ

下四

未遠同殿共床以此爲常故神物官  
ストホカラヒトツミアラカヒトツミカラスヲ  
 物亦未分別宮内立藏號曰齋藏令  
モノモズ 齋部氏永任其職又令天富命率供  
イミベウギランナガクヨサセソノツカサラマタシメアマノトミノミコトヲキテツカヘ  
 作諸氏造作大幣訖令天種子命  
マツレモロクノウヂビトラツクラオホミテグララリヌシムアマノタネコノミコトラン  
ヤネ 屋命 解除天罪國罪事所謂天罪者  
ハラヘアマツツニクニツツミノコトライハユルアマツツニ  
出孫 上既設訖國罪者國中人民所犯出  
ウヘニステニマケヲリヌクニツツニ

○正訓古語拾遺

○十九



ツミナリシノコトハツツセアリナカドミノハレヒコトニカレ<sup>タテ、マツリノニハ</sup>  
罪其事具在中臣禊詞爾乃立靈時<sup>ニド、ミノヤマナカアマノトミノミコトツラネミテラフリトゴトランテマツル</sup>  
於鳥見山中天富命陳幣祝詞禊祀<sup>アマツカミラアネクツキイテモロクノマツラテカシヤルアマカミクワカミノミタマノミ</sup>  
皇天徧秩群望以答神祇出恩焉是<sup>モテナカドミイミベフタウチトモニツカサルイハヒマツル</sup>  
以中臣齋部二氏俱掌祠祀出職<sup>メノキミノウチツカマルカグラノコトニコノホカノモロウチオククアリ</sup>  
女君氏供神樂出事自餘諸氏各有<sup>ソノツカサドルイタリテニシキノミツガキノミカドヤ、オソリカミノミイツラ</sup>  
其職也至于磯城瑞垣朝漸畏神威<sup>ヒトツミアラカマズ、ズヤカラカレサニシイニベウチラフキテイシコリドメノ</sup>

下五

同殿不安故更令齋部氏率石凝姥<sup>カミノハツゴアマノマヒトツノカミノハツゴフタウチラサラニツクリカミツラ</sup>  
神裔天目一箇神裔二氏更鑄鏡造<sup>ツルキラテオホミマモノノミシルシトコハイマアマツヒツキシロシメスヒ</sup>  
劍以爲護身御璽是今踐祚出日所<sup>タテマツミシルシノカミツルギニマスカレツキテニヤマトノカサヌヒノムラコトニ</sup>  
獻神璽鏡劍也仍就於倭笠縫邑殊<sup>タテ、シキノヒモロギラマツリウツシアマテラスオホミカミマタクサナキノ</sup>  
立磯城神籬奉遷天照大神及草薙<sup>ツルキラシムヒメミコトヨスキイリヒメノミコトランマツライツキツノウツシ</sup>  
劍令皇女豐鍬入姬命奉齋焉其遷



祭出夕宮人皆參終夜宴樂歌曰美  
マツル ユヰベニヤビトニナマキリヨモスガラトヨノアカリシテウタヒケラシクニ  
 夜比登能於保與須我良余伊佐登  
ヤビトノオホヨスガラニイサト  
 保志由伎能與呂志茂於保與須我  
ホシユキノヨロシモオホヨスガ  
 良余今俗歌曰美夜比止乃於保與  
ラニイノヒトウタヒケラシクニヤビト止乃於保與  
 與侶志茂於保與又六年祭八十  
ヨロツノカミタチラカレサダムマツヤシロクニツヤシロマタカムドコカムベラ  
 許侶茂詞出轉也  
コロモモコトウツルナリ  
 萬群神仍定天社國社及神地神戶  
ヨロツノカミタチラカレサダムマツヤシロクニツヤシロマタカムドコカムベラ

始令貢男弓弭出調女手末出調今神  
ハジメテシムタテマツラフトコノユハズノニラギヲニナノタナスエノミツギライマカ  
 祇出祭用熊皮鹿皮角布等此緣也  
ミノマツリニモチルクマノカハシカノカハツヌヌノドモヲコレノコトノモトナリ  
 泊于卷向玉城朝令皇女倭姬命  
オヨビテニマキムクノタマキノミカドシムヒメミコヤマトヒメノミコトヲク  
 第二皇女母奉齋天照大神仍隨神  
ツギノヒメミコマツライツキアマテラスオホミガミヲカレマニオホヒガミ  
 皇后狹穗姬奉齋天照大神仍隨神  
オホキサキハサホヒメニヌマツライツキアマテラスオホミガミヲカレマニオホヒガミ  
 教立其祠於伊勢國五十鈴川上因  
ヲシテタツクノミヤシロラニイセノクニイサノカハカミカレ  
 興齋宮令倭姬命居焉始在天上預  
タテイツキノミヤシムヤマトヒメノミコトヲラハジメマストキアメニカネテ

○正訓古語拾遺

○廿一



結幽契衢神先降深有以矣此御世  
始以弓矢刀祭神祇更定神地神戶  
又新羅王子海檜槍來歸今在但馬  
國出石郡爲大社也至於纏向日代  
朝令日本武命征討東夷仍枉導詣  
伊勢神宮辭見倭姬命以草薙劍授

日本武命而教曰慎莫怠也日本武  
命既平東虜還至尾張國納宮篁媛  
淹留踰月解劍置宅徒行登膽吹山  
中毒而薨其草薙劍今在尾張國熱  
田社未叙禮典也至於磐余稚櫻朝  
住吉大神顯矣征伏新羅三韓始朝



百濟國王懇致其誠終無欺貳也至  
於輕嶋豐明朝百濟王貢博士王仁  
是河内文首始祖也秦公祖弓月率  
百井縣民而歸化矣漢直祖阿知使  
主率十七縣民而來朝焉秦漢百濟  
内附土民各以萬計足可褒賞皆有

其祠未預幣例也至於後磐余稚櫻  
朝三韓貢獻奕世無絕齋藏出傍更  
建内藏分收官物仍令阿知使主與  
百濟博士王仁記其出納始更定藏  
部至於長谷朝倉朝秦氏分散寄隸  
他族秦酒公進仕蒙寵詔聚秦氏賜



於酒公仍率領百八十種勝部蠶織

貢調充積庭中因賜姓宇豆麻佐

積埋益也所貢絹綿軟於肌虜故訓

秦字謂出波陀仍以秦氏所貢絹纏

謂秦機纏根源也自此而後諸

國貢調年年盈溢更立大藏令蘓我

麻智宿禰檢校三藏齋藏內秦氏出

納其物東西文氏勘録其簿是以漢

氏賜姓爲內藏大藏令秦漢二氏爲

內藏大藏主鑰藏部出録也至於小

治田朝太玉出胤不絶如帶天恩興

廢繼絶纔供其職至于難波長柄豐

前朝白雉四年以小華下諱齋部首



作賀斯拜神官頭サカシメシテカムツカサカニ今神祇イマノカミツカサシムツカサドラツキテキミノ令掌叙王カミ

族宮内禮儀婚姻卜筮事夏冬二季ヤカラヲオホウチノキヤゴトトツギヤサウラナヒノコトラナツフユフタタヒノ

御卜出式始起此時作賀斯出胤不ミウラノリザハジテオホリコノトキニサカシノチス

能繼其職陵遲衰微以至今至于淨アツギソノツカサラスタレオトロヘテイタレリイマニイタリテニキヨ

御原朝改天下万姓而分爲八等唯ミハラノミカドアラマアマクシタノヨツカネラテワカチユフヤシニタツ

序當年出勞不本天降出績其二曰ツギテフノトキノイタツキラスモツケアモリノイサラニフノフタツライフ

朝臣以賜中臣氏命以太刀其三日アソミトソラタマヒナカドミウチニオスシモテスタチラソノミツライフ

宿禰以賜齋部氏命以小刀其四曰スシネトソラタマヒテイミベウチニオスシモテスカタナラソノヨツライフ

忌寸以爲秦漢二氏及百濟文氏等イミキトソラスハダアヤフタウチマタクタラノアヤウチラ

出姓カネトケシ蓋與齋部共預齋藏事因以爲カネトナリイマヤマトカチノアヤウチノ多クハスハナラナラ蓋

緣也マタコレ至大寶年中初有記文神祇イタリテダイホウノトシニハジテアレシカミ

出簿猶無明案望秩出禮未制其式ノミナフミナホナシアマカラサメカミマツリノキヤゴトズツクラソノワザラ



イタリテアムビヤウノトシニカムガヘツクルカムニテナカトニホシキニイキホウコウ  
至天平年中勘造神帳中臣專權任  
マニツクロフアルタヨリモノハチセキヤシモニナアカリナキタヨリモノハオホキ  
意取捨有由者小祀皆列無縁者大  
ヤシモナホノヅキオマヘマラシテスベマツルソノカミホシキナリモロノヤシロヨセマツル  
社猶廢敷奏施行當時獨步諸社封  
オホキカラスベテイルヒトリノカトニオコリテヨリアモリオヨズテニヒムカシニトケツカヘ  
稅總入一門起自天降洎乎東征扈  
マツルシモロカミノミナアラスレタルニフミニアルハウ共リテアマツカミノイツシキニトトリ  
從群神名顯國史或承皇天出嚴命  
ナリアマツヒツギノミマモリトアレハアヒテオホミイヅノミサカリ九ニタスク  
爲寶基出鎮衛或遇昌運出洪啟助

カムダカラノミイサラハサレバイタリテスニシルシイサラムクウイタリラベ  
神器出大造然則至於録功酬庸須  
シオナジクアザルミマツリニアルハズイラアカツミテグララカズニナホイダ  
應同預祀典或未入班幣出例猶懷  
ケリカイスイガウラミラマテマタクサナキノツルギハケヤケキ  
祕外推出恨况復草薙神劍者尤是  
アツミルシナリヨリヤマトタケシニトカヘリマセルトシトマリマスヲ  
天璽自日本武尊愷旋出年留在尾  
ハリノクニアツタノヤシロニススビトトリテテシカバズアヘイテクニヲカム  
張國熱田社外賊偷逃不能出境神  
ダカラクシビナルアトモテコラベシオモヒルサレバタテマツルミテグラフヒベシ  
物靈驗以此可觀然則奉幣出日可



同致敬而久代闕如不脩其禮所遺  
一也夫尊祖敬宗禮教所先故聖皇  
登極受終文祖類于上帝禋于六宗  
望于山川徧于群神然則天照大神  
者惟祖惟宗尊無二因自餘諸神者  
乃子乃臣孰能敢抗而今神祇官班

幣出日諸神出後叙伊勢神宮所遺  
二也天照大神本與帝同殿故供奉  
出儀君神一體始自天上中臣齋部  
二氏相副奉禱日神媛女出祖亦解  
神怒然則三氏出職不可相離而今  
伊勢宮司獨任中臣氏不預二氏所



遺三也。凡奉造神殿者，皆須依神代  
出職。齋部官率御木鹿香二鄉齋部  
伐以齋斧，掘以齋鉏。然後工夫下手  
造畢，出後齋部殿祭及門祭訖，乃可  
御坐而造伊勢宮。及大嘗由紀王基  
宮，皆不預齋部所遺四也。又殿祭門

祭者元太玉命供奉出儀。齋部氏出  
所職也。雖然中臣齋部共任神祇官  
相副供奉。故宮内省奏詞稱將供奉  
御殿祭而中臣齋部候御門至寶龜  
年中初宮内少輔從五位下中臣朝  
臣常恣改奏詞曰中臣率齋部候御



カトニテリカノツカサソノマニ、ナカクシテ、チノアト、ニイマズ、アラタメ  
門者彼省因循永爲後例于今未改  
ルノコレイシ、ナリ、マタハジメテヨリカミヨ、ナカドミイミベ、ツカハ  
所遺五也又肇自神代中臣齋部供  
マシ、カムワサニナシ、ワキタメ、ナカゴヨリ、コノカタ、イキホヒウツリヒト  
奉神事無有差降中間以來權移一  
ウチニイツキノツカサカムツカサナカドミイミベ、ハモトオナシク  
氏齋宮寮主神司中臣齋部者元同  
ナツクシテ、サナリサルニエムリヤクノハジメ、アサハラノヒメ、ミコ、マツラミイツキ  
七位官而延曆初朝原内親王奉齋  
ヒ、コトニオトシテ、イミベラナシ、ヒテ、マツクラサツカサトニイマズ、カトナシ  
出日殊降齋部爲八位官于今未復

ルノコレムツナリ、オヨソタマツラミテ、クラモロガミニハ、ナカドミイミベ  
所遺六也凡奉幣諸神者中臣齋部  
トモニアツカリソノワザニサルニイマ、オホミコトモチノカム、ツカサヒトリメシテ、ナカ  
共預其事而今太宰主神司獨任中  
ドミラズ、アツカラシメ、イミベラ、ルノコレナツナリクニ、グノオホヤシロモ、マタ  
臣不預齋部所遺七也諸國大社亦  
メシテ、ナカドミラズ、アツカラシメ、イミベラ、ルノコレヤツナリ、オヨソタマツラミ  
任中臣不預齋部所遺八也凡鎮魂  
ノヨソヒ、ハ、アメン、ウズ、メノミコト、ノ、アトナリ、サレ、バ、ミ、カム、ノ、コ  
出儀者天鈿女命出遺跡然則御巫  
ツカサベシ、ヨサス、フルキ、ウチラ、サレ、イマ、トコロ、エラフ、ズ、キラハ、コトウチラ  
出職應任舊氏而今所選不論他氏



ルノコレヨシナリオヨソツルオホミテクラハ<sub>マタ</sub>ベシヨリカミヨ  
所遺九也凡造大幣者亦須依神代  
ノツカサニイミベ<sub>ツカサ</sub>キテツクリマツルモロウチコトラヒテアトツクリ  
出職齋部出官率供作諸氏准例造  
ソチフサレバ<sub>カム</sub>ツカサノカムトモノフベシアルナカドニイミベ  
備然則神祇官神部可有中臣齋部  
サルメ<sub>カミ</sub>ツクリタマスリタテヌヒカムハトリシドリラミ  
媛女鏡作玉作盾作神服倭文麻績  
ラノウチニサルニイマタ<sub>アリテ</sub>ナカドニイミベ<sub>ラノ</sub>フタツミツノウチ  
等氏而今唯有中臣齋部等二三氏  
ホカノウチ<sub>ス</sub>アツカラ<sub>ミエ</sub>ラビニカミノハツゴアラケウセテソノイ  
自餘諸氏不預考選神裔亡散其葉

下十五

ス<sub>タエ</sub>ナト<sub>ル</sub>ノコレト<sub>ラ</sub>ナリ<sub>マタ</sub>シヤウ<sub>ハウ</sub>ノ<sub>コ</sub>ノトセ<sub>ヒ</sub>オホ<sub>ト</sub>モ<sub>ヒ</sub>ツカ  
將絶所遺十也又勝寶九歳左辨官  
ミコトノリ<sub>ヨリ</sub>イマ<sub>ノ</sub>チ<sub>イ</sub>セ<sub>ノ</sub>オホ<sub>ミ</sub>ガ<sub>ミ</sub>ノ<sub>ミ</sub>ヤ<sub>ノ</sub>ミテ<sub>グ</sub>ラ<sub>ヴ</sub>カ<sub>ヒ</sub>  
口宣自今以後伊勢大神宮幣帛使  
モハラ<sub>モ</sub>チ<sub>ヒ</sub>テ<sub>ナ</sub>カド<sub>ミ</sub>ヲ<sub>ナ</sub>カレ<sub>ツ</sub>カ<sub>ス</sub>イ<sub>ホ</sub>カ<sub>カ</sub>ネ<sub>ラ</sub>テ<sub>リ</sub>ワ<sub>ノ</sub>コト<sub>ド</sub>ネ<sub>オ</sub>ナ<sub>ハ</sub>レ  
專用中臣勿差他姓者其事雖不行  
ナホ<sub>ラ</sub>レ<sub>テ</sub>ノ<sub>セ</sub>ツカ<sub>サ</sub>ノ<sub>ア</sub>ト<sub>ス</sub>ズ<sub>ケ</sub>ヅ<sub>リ</sub>ワ<sub>ケ</sub>ル<sub>ノ</sub>コレト<sub>ラ</sub>ヒ<sub>ト</sub>ツ<sub>ナ</sub>リ<sub>ム</sub>カ  
猶所載官例未刊除所遺十一也昔  
シ<sub>カ</sub>ミ<sub>ヨ</sub>ニ<sub>オ</sub>ホ<sub>ト</sub>コ<sub>ヌ</sub>シ<sub>ノ</sub>カ<sub>ミ</sub>ツ<sub>クリ</sub>マ<sub>ツ</sub>ラ<sub>ト</sub>キ<sub>ヲ</sub>ウ<sub>シ</sub>ノ<sub>シ</sub>ハ  
在神代大地王神營田出日以牛宗  
ク<sub>シ</sub>五<sub>キ</sub>タ<sub>ビ</sub>ト<sub>ニ</sub>ト<sub>キ</sub>ミ<sub>ト</sub>シ<sub>ノ</sub>カ<sub>ミ</sub>ノ<sub>ミ</sub>コ<sub>ユ</sub>キ<sub>テ</sub>ニ<sub>フ</sub>ノ<sub>ミ</sub>タ  
食田人于時御歳神出子至於其田

○正訓古語拾遺

○世



唾饗而還以狀告父御歲神發怒以  
蝗放其田苗葉忽枯損似篠竹於是  
大地主神令片巫志肱巫今俗占求其由御歲神爲崇宜獻白猪  
神答曰實吾意也宜以麻柄作持持  
白馬白鷄以解其怒依教奉謝御歲

出乃以其葉掃出以天押草押出以  
烏扇扇出若如此不出去者宜以牛  
宍置溝口作男莖形以加出是所  
薏苡子蜀椒吳桃葉及鹽班置其  
畔古語薏苡仍從其教苗葉復茂年  
穀豐稔是今神祇官以白猪白馬白



カケマシルニトシシカニラ コトモトナリ  
鷄祭御歳神出縁也

前件神代出事説似盤古疑氷出意

取信寔難然我國家神物靈蹤今皆

見存觸事有効不可謂虛但中古尚

朴禮樂未明制事垂法遺漏多矣方

今聖運初啓照堯暉於八洲寶曆惟

新蕩舜波於四海易鄙俗於往代改

批政於當年隨時垂制流萬葉出英

風興廢繼絕補千載出闕典若當此

造式出年不制彼望秩出禮竊恐後

出見今猶今出見古矣愚臣廣成朽

邁出齡既逾八十犬馬出戀日暮彌



シキナリタチマチニニマカリタマムウラツチシタニチマタノカダリゴトモナホ  
 切忽然遷化含恨地下街巷出談猶  
アリベキートルツネビトノオモヒモズヤスカラタニスステウシモアヒテモ  
 有可取庸夫出思不易徒弃幸遇求  
トヒテラフニヨニフカクヨロビツタヘゴトノザラコラタエネギマツラクノフミ  
 訪出休運深歡口實出不墜庶斯文  
ノタカクトホリテムラミソナハツフサニミテラシマラス  
 出高達被天鑿出曲照焉  
ダイドウノミトセキサラギノトラカマリニカノヒ  
 大同三年二月十三日  
 古語拾遺 終

古語乃遺種る哉拾ひて聞  
 之やうられト高き那宜岐の  
 本林尔女稚女に終るを神代  
 乃文字もとるるられより  
 其くろ我人う守都又志心の事并  
 乃陰も並へる其きびる



も女補をて論ひましつ  
正さまする此書よ古より  
めりたる徒を誰まよるん  
蔭にちるる

明治二年冬 岩崎長雄

咲園先生著述書目

秋田屋太右衛門記

古道或問

一冊 刻成

新しんと小こ掲か示しさせ給へる御制札乃第一條第二條漢語あるを以或人漢学を専務とをべく御勸拜被遊あそいやと疑問し且本居平田二大人乃学風敷衍を問難せしを悉小辨わめらる古来儒流の得失當今学問の本末順逆しん正しく論ろんひ答へらるる書あるを以大博士平田大人も甚く褒賞せられし也

古語拾遺正訓

二冊 刻成

これ古こ史し記き日本書紀に並なびてめでとき神典しんふれどもとを漢文ふるを以て大おほこの人漢文にの讀来りしを門人かどのこをるるにを以て古訓古史記古史成せいの躰たふふらひて訂正てい本ほんは本文ぶん小古訓を附られ且此書こ見みべみ支し心得こころを悉し小記せうし添そられとまば皇典学必讀の物と成なり

○咲園著述書目

○一



假字眞字鏡

一冊 刻成

附録屋翁おふし文字あま四十七字の歌神世文字眞字五十連音  
假字の俗弊小書ふしとる眞字乃覚束ふき我々志らべ訂し末に  
片假字は本字をも出されとあり書翰を古帖を採出らまると此を以  
と風流小して童児の手習ふ為ふも初学の假字格を知る便ふも宜  
也故綴小路正一位有長脚以こじう感給ひてはし御歌を加牙  
と末私中島廣足大人の奥書ふも歌文のむよを必此假字のさよ  
母を正て物をべまふととり、れとり

五月雨抄

小本 二冊 刻成

こハ永祿小天主教渡来せしとて寛永小嚴禁せきを給ひし間の夏  
実島原邪徒乃一件餘賊の斬刑配流の始末とと教意のあらはる志  
ど豊後白杵ふる三浦安貞ぬしの天明四年小書法を置れしを元治  
四年小二子山人校正して猶近年長崎浦上辺の邪徒の夏情状も附  
録して板ふ忍らしめらまるとる茂大人丹訂正奥書ふ乞ひとる也近  
世邪教排拆の書敷多出とれどかく計て委曲ふるをあらはらばん

虎狼痢 豫防方

二冊

こと大人の二男介堂磐守君文久二年の夏官史小従いて上海小航  
せられとる日記上海雜記と題しとる物有を其中を彼土人の洋  
教小蠱惑せらる、情態抄して始小虎狼痢病豫防藥劑方を出し  
其藥劑ととも小洋教の悪毒を防ふしめん迎調じ出らまるとる物小  
あて上の五月雨抄と合を服せへ交良方ふる茂明治三年の夏君再  
び航勢られて親しく見聞せらまるとる夏とも多書つぎて皇國の滯  
毒を療せらるゝ也

國乃眞柱

一冊 刻成

夫は万葉集三望不尽山詠歌小天地の分まし時を神をびて云々又  
日本れやまとの國乃鎮ともい未を神のも未とあるをとり平田  
翁の童門入學問小夫皇國者神眞史本域大陽史所初出國土史所始  
立固大地史元首而為方法史所根據也云々とてまし小をりて皇  
國最第一の高嶺ふる富岳ハ地球の腦髓精神の府と云ふ神理を  
悟得られ麓ふる我夷の万國皇國小従服事へ奉ふ牙史理を説明  
しはと近世富士講と云ふ一種乃俗輩の神佛混淆の僻説を唱ふる

○咲園著述書目

○二



惑いを示らさしめざる物ある哉西川須賀雄大人筆記せられし也

### 靈乃在處

一冊

この天下の萬物叁柱の大神の分靈を稟得て生出るものあるは大地も則萬の一ツふして必分靈の宿り給ふ脳髓の處あるへりさて其脳髓ハ東方元首の國と稱するこまの皇大御國ある莫哉悉小論をまよる也

### 太諄辭考

一冊

世小トホカニエニタメと云ふ隨神カムヤマトなる神言あるを近世の大人とちの太々龜トの術ウヅ用ふる物も志て神子申上カミト云々言コトハあらざる浅俗神道者の三種枝と名付けて被詞の如くかもへるハ非アヘおとて捨てんとせらるゝを大人聊思カミ得らるゝ莫有て弘化二年小州稿し置まざる哉岩崎大人取見ていよく感誥カミひて猶自らの

考へを種々加へて

### 倭錦

二冊

こと文政乃帝の敷島のやまと錦小ありてこそあら紅の色もはえあまと遊むされざる御製を奉戴して倭心を綾小織出らまざる隨筆物あるを中島廣足大人評を書入らまざる也

### 壬申亂標釋

一冊

あら近來の儒者等の著てされたる國史の評共小大海人皇子マ御名ミコの御上ミコ哉ミコと無ミコ礼ミコげ小書ミコふしとる條あるを畏ミコ憤りて日ミコ本書紀ある壬申亂の一段ミコ天智天皇の末ミコ御上ミコ大海人皇を悉小綾をられとるふミコ日本史の此一ミコ段を見る折小地名人名の訓吉野近江兩朝の人ミコ之ミコ分ミコおがつのかく心得ミコ得てあるを此標釈を傍小おきて見る時々掌をささるかく分明小解得る也

### 倭文乃織映

小本 一冊



これ近世の大人等の著とされたる書どもに漢字の熟字を切とめ  
と和訓茂附らまはるゝは免でとさきりぎりをバ男守忠君と門人森田稻  
守君青山垂穂君ふどにおふせて抄させ五十音の部小分ちて字引  
の如くせられとまバ倭文を作し著書を綴る竹ふど最便とき物也

### 咲園雜芳

五冊

これ大人壯年を初漫遊を好まれて因て見聞せらまはし奇事珍  
説種々書集められとる隨筆ふり

### 忠孝實行録

前篇

五冊

これ初漫遊中小親しく見聞せられし忠孝節義の實行茂筆記勢ふ  
まはる物ふして歡善の一助教話の種子とふをふとろしき也

### 本教平話

初篇

三冊

これは皇神の道を女童子未で小教示さんとして忠臣孝子の実行を多  
九引ふ安らか小講ぜらる、茂門人等の筆記せらまはし也

### 画傳南北辨

二冊

大人幼年より画を好癖有て長寄小在て鐵翁上人不下逸雲老人ふ  
ど、友と交らまはりさて此人は又清朝人ふどの画道の物語又  
自らおもひ得られとる夏ども茂筆記せられて佐嘉藩乃儒官圮南  
武富先生小問正さまとる物ふして漢土の士夫画院躰画南北二  
派の道統を更ふと皇朝画家の雅俗二躰南北二流をも悉小論辨せ  
られ末に落款式鑑定法までを載らまはれむ実小画家鑑賞家有益  
の珍書といふべし

### 花鳥春秋

十冊

これ擅几叢書小載せとる花鳥春秋の文小武富先生の傳を副られ  
とるを先生の二男林屋君と大人并小男泉香君、介堂君と門人荒木  
鐵操君ふど古画を縮寫せらまはるとるを彩色摺しとる物ふはバ四  
時の花鳥虫乃圖大らと洩る、夏ふし南画嗜好の騷客一覽せら  
まはむ必愛翫し給べき雅卷ふ也

### 授業録

三冊

○咲園著述書目



大人乃二男外堂君ハ画学を武富先生小受用筆を鐵翁上人逸雲老人小学むれりしハ益を乞はる、度ごと小画乘の秘奥を開示して口授加筆せらまし哉其論を記し其筆跡を其末、板小忍らせらま墨色濃淡枝分ちて摺ら勢とりされを一度此書を見る時ハ三先生を正面授口訣字受る小等しく志て容易く南画の要旨を領悟せらる、奇書といふべし。

大人の著撰猶數多有べけまバ、編成る小從ひて次に書目を出し侍るべし。

明治三年庚午霜月

南画の要旨を領悟せらる、奇書といふべし。大人の著撰猶數多有べけまバ、編成る小從ひて次に書目を出し侍るべし。明治三年庚午霜月。

製本發行所

尾張名古屋	永樂屋東四郎
同	萬屋東平
伊勢津	篠田伊十郎
信州飯田	河内屋新太郎
肥前長崎	小埜左右助
薩摩鹿兒嶋	青木泰輔
東京	須原屋茂兵衛
西京	池村久兵衛
同	北村四郎兵衛
大坂	中井源兵衛
同	秋田屋太右衛門



